

さつきの旅

汀 鷗

若葉青葉の風かほる日は少なくて、東角に曇り勝なる今日この頃、旅にはよくないが思ひたつたのが吉日、いつもの装束で東京の出發は五月五日朝の六時、中央東線沿道の花は散つて野も山も緑の天地、八王子淺川を過ぎてゆけば、小佛峠のトンネル大小いくつか、停車場毎に上り列車を待合はす時間もながく、この汽車頗る不愉快なり。

低く垂れし空は山に入りてよりいよ／＼低く、おり／＼は雨さへおとし來て、行手の方は霧にかくれつまたあらはれつ

こきみどりあさきみどりのそのなかに

まぢりてあかさやまつゝじかな

きなるはなむらさきのはなしろきはな

野をいろどりぬゆくはるの野を

これを色彩歌とでも申さふ、窓外の景色の寫生なり。

乞食さへ今は歩行かぬといふ、長い／＼笹子のトンネルを出れば初鹿野の驛なり、車を下りて驛前の塚田屋といふ茶店に休む、笹子の峠から雪の白峰を寫さうと思つて來たのだが、この天氣では泊らうか先へ往かうかと思案する、先といふのは日野春で、駒ヶ岳には雪があらうとの想像、そこで亭主にいきいたら此四五日の暖氣でトテモ雪はありますまい、白峯なら向ふの山からも見えますといふので、終に此家に厄介になることに極まつた。

雨は小降りになつた、時間は早い、不用な荷物を預けて川下へゆく、宿から二町ばかりの處に大きな杉の木がある、四方の淡い緑の中に、これは濃い墨でも塗つたやうに眞直に突立つてゐる、モノになるかと考へて通り過る、二三十の人家を抜けると一方は川原一方は崖、黄ばむた花崗岩が露出してゐる、水害のあとで川床は殺風景でトテモ繪にならない。橋を渡つて小高い處へ上る、雨が盛むに降り出す、逃込むのは避病院の裏手でこゝから見ると天目山の方が霞むで例の大杉がよく締りをつけてくれる、一枚出來そうだ、番人も居なければ患者も居ず、切たが、傳染病室の窓下などはいさゝか感じがわるい。

二時間の後には宿へ歸つた、見かけは一寸よかつたが、さて二階へ通されて見て少なからず閉口した、室は八疊天井なし、窓の障子には穴がある、縁側の障子は立ツケが悪く、彼方此方から冷たい風が吹き込で寒い、疊の敷き合せが隙いてゐて、下から煙りが上る。哀れな火鉢を抱へて雑誌をよむ、また一しきり雨が降つて來て俄に部屋が暗くなる、火鉢の炭は灰になる、燈火はまだ來ない、汽車の笛が遠くからきこえる、何だか泣きたくなつて來た。

冷飯で夕餉を濟ませて早くから寐床に入る。ランプを消して不圖天井を見たら、屋根は無数の小穴で、闇に白く空が見える、恰も晴れた夜の星の光に異ならぬ、家の中に寐てゐるとは思はれない、その穴から時々雨がふり込むで顔にかゝる、野宿と思へば我慢も出來やう。

六日はおそく起きた。宿屋の便所はお話にならないので、停車場へ往つて用を達して来る。今日も降つたり止むだりしてゐる。晴間を見て向ふの丘へゆく、雨にぬれて美はしい若草を踏むて楓の林に入れば、中に小さなお宮がある、雨よけによいと思つて、三脚を据えて、霧にかくるゝ山を見てゐると、急に後ろのお宮の中で物音がする、驚いて見れば、階段の下に小さな下駄が五六足あつて、村の小供が中に入つて扉をメ切つてゐたのであつた。

空模様が見えよくなる、楓の林を離れて畑の中で稽古繪を一枚かく。

寒い、宿屋といふたとして風呂もなし、飯の温かいのは朝ばかり、昨日以来三度共罐詰牛肉のやまと煮、これも野宿式と我慢する。親切なおカミさんは、僅かのお茶代に御禮ごゝろか、駄菓子を澤山持つて来てくれる、夕方からまた雨がふり出した。

七日の朝は、曇つてゐたが出發と極めて早く起きた、顔洗ひに見世へゆくと、脚のついた手水盥で、小女が雑巾をゆすいでゐる、おカミさんはその水を捨て、洗ひもせずに手桶の水をくむて出す、あたりに小流一つない不自由な處だ、これも野宿式かと我慢して顔を洗つたが、決してよい氣持ではなかつた。

瀟車の時間に間があるので、停車場の向ふから大杉を寫す。黒く雄々しい姿がよい、前景の草原もよい。杉の根元の家もよい、こゝでは三時間程熱心に畫いた。

甲府へ着いたのは十二時頃であつたらう、右左口迄五里の道を

歩くのである、初めての處で方角が知れない、人に教へられて鯉澤行馬車のレールに沿ふてゆく、雨が盛むに降つて来た、輕らぬ荷物は肩にある、道は悪くなる、可なり難澁をしたが、漸く市中を開放れるころ雨が止むて、行手の山も見えて来る、日の光りもさして来る、幸に石道で、忽ち乾いて暖かなよい日になつた。

淋しい村をいくつか過ぎる、一寸腰かけて休むやうな家は一軒もない、三里ほどにして川のふちへ出て、靜かな水を一枚寫生した、柳の色がよい。

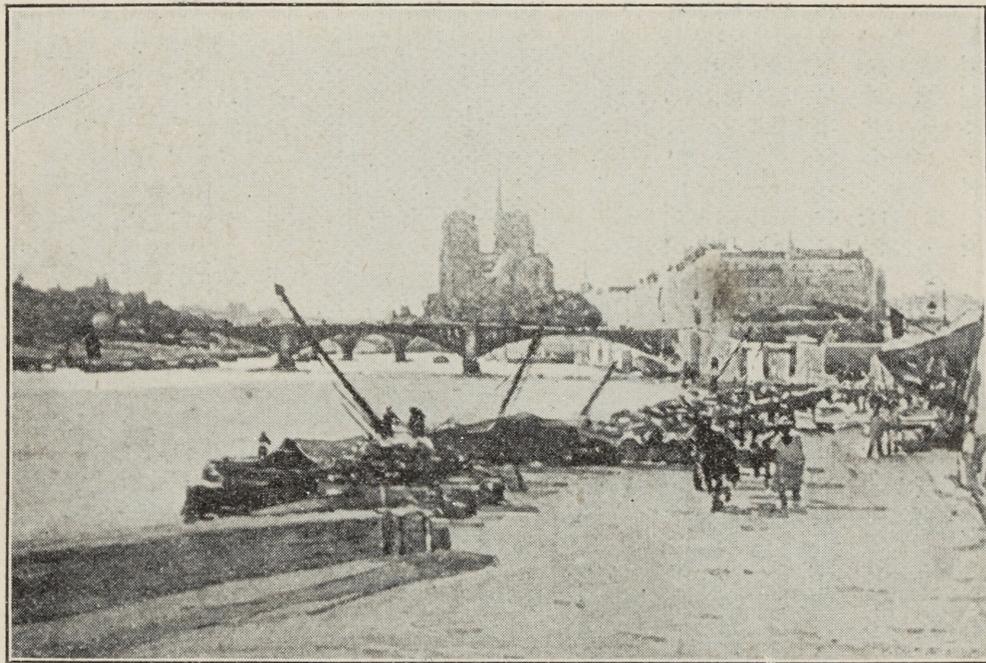
笛吹の合流する邊で川を渡り、下曾根を過ると、道は漸く山に入る。小流があつて悪くない景色だ。右左口の村近くから右に白峰の尖端が見える、快よい感じの山で、見たばかりでも身震がしさうだ、明日の朝を樂しみに宿へいそぐ。

右左口の村はやゝ上りの坂道になつてゐる、中程に橘田きつたといふ唯一の旅店がある、門構へ廣玄關の嚴しい體裁だが、さてその穢なさ、いま養蠶中だといふので随分取散らかされてゐる。やがて奥の八疊へ通される、うす暗いやな座敷なり、小さな庭にしほらしくも紅い躑躅の花が咲いてゐて、パツと華やかに夕日がさしたかと思ふと、ハラ／＼と雨が降つて来る、青空に雲の往來は烈しい。

暗い部屋の隅には、垢に汚れて縞目の見えぬ固さうな蒲團が高く積まれてゐる、今夜あれを着せられるのかと思ふとウンザリする、夕飯が来る、何やら性の知れぬ肴が膳の上にある、鶏卵

を貰つてやつと飯をすます。情ないランプが来る、とても書物を讀むことは出来ぬ。入口の圍爐裡のほとりで話をしてゐた二人の男が這入つて来る、御合客様とあつて朦朧たる燈火の光りで見ると、一人は六十位ひの赤顔の老爺、穢ない破れたシャツツを肌につけて、何やら黄色つばい衿を着てゐる。今一人の男は三十位ひの印袴天股引腹掛といふ風で、一寸小綺麗にしてゐる、これも旅なればと共に語りて、此邊の様子をきく。老爺は武田耕雲齋の騒ぎに、お目付の人足になつて、信州から江州へ往つたと其時の事を話す、二人共古道具屋で、面白い掘出物のことを語り合ふ。

いよく晝間見た穢ない蒲團が敷かれた、例の通り枕を新聞で包むやら外套で肩を包むやら、いろ／＼工風して床に入る。彼等ほと見ると、此寒い夜を眞裸體まっぱたかになつて、着物を上へかけ、蒲團の中にもぐり込んでしまつた。



筆ンラア 里 巴

不愉快な一夜は明けて、

八日は快晴であつた。七時半に出發して峠にかゝる、西の方には雲があつて、白峰の尖頂は見えたり隠れたりする、北に當つて白く一筋の雪を残せる金峰も見える、朝の空に浮出た雪の山の美はしさはたとへるものがない。

峠は思つたより骨が折れた、山ウツギ卯の花山吹など、溪間に咲き亂れて美しい。絶頂で草山を前景として白峰の連峰を寫生する、背後には女坂峠の上に無細工な富士が突出てゐる、今迄暑さに苦しむだ身が、頂上の冷風に吹かれて縮み上る程寒くなる、登り切つた時は氷水でも飲みたかつたが、今は温かい甘酒が欲しい。

新道を下り、蘆川の流れに沿つて上ると、古關といふ村へ出る、小さな繪の幾枚も出來さうな處だ。辨當を使ふにも茶店らしいものがない、妙な家で一杯の茶を貰ひ、暫らく休んでいよく女坂峠にかゝる。

急ではないが、長い／＼厭な峠だ。幸ひに頂上近く迄溪流に沿つてゆくの、咽喉を濡らすに不自由

はない、靴下がはてつて足は痛くなる、汗で身うちがしとくになる。

頂上へは二時過に着いた。里は新緑の美はしき眺であつたが、こゝは梢に若葉の匂ひなく、冬木立の中を山櫻が白く淋しげに咲いてゐる。南の方は眼下に深碧の湖水が見えて、富士の頂は雪に隠れ、裾野の青木ヶ原が波形に連なつてゐる。

下りは何の苦もなく、三十分程で精進村に着いた。丁度鎮守の御祭りて、人の往來も多く賑やかで、門口の裾風呂には、誰憚らず女共が入浴してゐる家もあつた、此處には可なりの宿屋が二軒もある、湖に近い山田屋といふに宿をとる。

箱を持つて湖岸に出て見る。南風でザワ／＼と濁つた水が岸に寄せて来る、感じの悪いこと夥しい、崖を下りて一枚を寫せしも終に成功せず。

精進湖は、南の岸が溶岩で、眞黒に小さな島嶼をなしてゐる。

西と東は低い崖で、遠く見ると石垣でも築てあるやうで、山中の湖といふ自然の感じが乏しい。北は村に接して小さな砂濱があり、小舟も繫がれてやゝ趣がある、朝と夕は知らず、風のあつる眞晝の光景では、身に染みて畫筆を執る氣になれない。

宿へ歸る。御茶菓子も氣が利いてゐるし、ニッケルの湯沸しなど中々ハイカラだが、風呂はないといふ、東京を出てからまだ一度も湯に入らぬ、昨日から今日へかけて兩脚棒の如く疲れてゐる、旅は辛いものだと思つた。

頗る古雅な太鼓の音が、程近い鎮守の御宮からきこえる、此音

をきながら脚をさすり／＼蒲團の中に入る、寢着を貸してくれたので着かへたが、枕に著くと、間もなく肩のあたりがムツ／＼する、驚ろいて脱ぎ捨て、ソツと足下の方へ押やり、シヤツツ一つで再び臥床に入つた。

九日は朝早く目がさめた。窓押あけて曉の景色を見る、萌黄色の空をクツキリと、雪の富士は紅ぬに染分られて、薄雲が麓のあたりを柵引いてゐる。湖水は夢のやうに、靜かに山の影を浮べてゐる。スケッチを試みむともせず、稍久しく見惚れてゐた。村端れから、家の裏を寫して一枚を得、精進の村を跡にし、湖に沿ふて西の岸をゆけば、精進ホテルといへる白き建物がある外國人ならでは客にせぬとかきいたが、泊つて見たいと思ふ程の家ではない。

一里半にして本栖の村へ來た。湖は大きけれど、周圍の山も面白く、岸も變化に富み、樹木も澤山あつて、畫材の多い處である。湖を左に見て深林の中を一里ほど、釜額といふ小村に近き處で、龍ヶ岳を背景に一枚を寫した、此あたり、湖の中は一面の溶岩の島となりて、枯木の幹が洒されて白くなつてゐる。十數年前の大水に、根元の土を洗はれて、このやうに爲つたのだといふ。精進の湖は溜り水で、冬は一面に凍りて、其上を歩行が出来るさうだが、本栖は湧水で、冬は却て湯氣がたちて温かいといふことも聞いた。

右左口では養蠶は盛んであつたが、此處ではまだ桑の芽が出ない、夕方の風は身にしみて寒い。

宿は仲島屋といふ。入口から襖障子なしの二十二疊の大廣間で、お客は自分一人である。目を瞑つて無理に夕飯を詰め込み、早くから寢床に入る、幸に夜具はキレーであつた。十日快晴。朝の御飯は我慢にも咽喉を通らない、鶏卵はといへ



大下藤次郎筆

初鹿野の六杉

ば何處にも無いといふ、ヤット一膳すましてお茶をといへば、遠慮かと思つて無理にすゝめる、喧嘩しないばかりに争ふて、早々にして仕舞ひ、朝の湖水を寫し、村の街道を寫し、割石峠で、霞の中に幽かに輪廓を現はす自峰連峰を、遠く眺めつゝ辨當を

開く、大きな團飯二つ、味はつて見ると少しも鹽氣がない、梅干も香の物もない、結局これも草の中へ捨てゝ、峠を下り、本栖より二里、駿河の根原といふ村について、宿屋の前で坂道の寫生をする、彼方此方から見物人が集まる、やゝうるさいが、コナナ小さな處で、全村の人が出て來てもタカが知れてゐると、平氣でやつてゐたが、ホントに全村物出らしく、五六十人に取圍まれたのは少なからず閉口した。宿では、入口の廣い土間に裾風呂がある。火を焚

出したので、久し振で湯に入れるかと思ふと嬉しい。やがて加減がよいといふので、裸體になつたが、直ぐ傍の圍爐裡のまはりには、大勢の男女がコツヲを見てゐるので、少しキマリがわるい。流しといふものがなく、大盥の上に細い板が一枚わたしてある、その上でかけ湯をする、一度入つたら洗ひに出るといふことも出来ない、コレでは疲れの抜けやうもない。

鹽引に麩の御汁、不相變の御膳に向ふ。合宿二人、十四五の娘を連れた老爺で、これでも旅籠の飯と思つてか、貪り食つて膳の上はキレーに片づく、美しくも思はれた。早くから寝る、固い木枕で頭が馬鹿に痛い。

十一日、晴よりくもり。握り飯に懲りて、駄菓子一袋を辨當の代りに持ち、六時半出發する。廣々とした裾野に道は一筋、何處を見ても、家もなければ人影もなく、淋しい眺めである。朝日は富士の半面をてらして遠く霞み、やゝ紅味を帯びた緑の草は、露にぬれて洗つたやうに鮮やかである。木一本目に入らぬ此大廣野の眞中に、三脚を裾えて、パレットを握る時の心持は經驗の無い人には分るまいと大得意であつた。

荷馬車の往來が多く、道は極めて悪い。大小の石がゴロゴロしてゐて、ともすれば蹶き勝である。人穴村に人穴を見ず、上井出にて白糸の瀧を見る、名所とするに足れど、スケッチ箱開く氣にはなれず、右の方ネン／＼淵は、水勢烈しく、白糸よりも此方却て好まし。

一路坦々、砂塵高く、變化に乏しき道を、北山に一枚の寫生を

試み、天氣模様あしければ、急ぎに急ぎで根原より七里、夕刻大宮につき、淺間社内梅月に宿かる。

水美はしく流れ早き、湧玉の泉の前にせる、新しき室には、綿厚き座蒲團あり、火鉢には銀瓶たぎり、浴室廣く湯は清く、燈火には電燈あり、膳の上には鮮魚鳥獸の數々の和洋料理あり、昨夜と今夜、乞食より俄に大名に早變りせる、境遇の變化に驚きつゝ、雪の如く白きシート敷きたる、軟らかき臥床に入りて、久々にて温かき夢を結むだ。

十二日、雨が強いので半日籠城、寫生畫に加筆などする。午後から、晴間を淺間の裏へゆきて杉木立を寫す。宿の居心地頗るよく、近處に材料も多いので、成ることならこのまゝ幾日も滞留して居たいと思ふ。

十三日、快晴。町端れから鐵道馬車に乗つて鈴川へ向ふ。乗合に一人の若者が居て、こゝでは富士が北に見えるが、東京では西の方に見えます。東京は妙な處で、洲崎あたりで見ると、日の出が東の時もあり、西の方に見える時もありますと眞面目で云ふ。合客一同大笑ひ。コンナ男を方角も知らぬ人といふのであらう。

鈴川から瀧車、大磯に下りて知人をたづね、夜に入つて東京へ歸る、銀座街頭瓦斯燈の光りは、柳の青葉に包まれて綠色に輝いて居た。

*

*

*

*

*